

シンガポール英語の機能 ——フェイス威嚇行為の観点から——

Function of Singapore English: Perspective of Face-Threatening Acts

江田 優子 ペギー

Yuko Peggie Koda

跡見学園女子大学

Atomi University

Abstract: Singlish, the colloquial style of indigenous English in Singapore, has dedicated the national identity as well as the Lingua Franca to Singaporeans in the multiethnic circumstances. This article provides an analysis of the function of particles, the discourse markers which characterize Singlish, from a sociolinguistics point of view, especially a perspective of face-threatening acts.

Key words: Singapore English, Singlish, particles, function, politeness

はじめに

標準日本語の話し手が場面や相手によっては「ありがとうございます」というところを「ありがとさん」、「おおきに」、また「コピーしておきました」を「コピーしといた」など、標準日本語から砕けた表現（または方言）にコードスイッチングすることがある。標準日本語に限定すれば「ありがとうございます」、「コピーしておきました」のほうが丁寧な文体だが、なぜこのような変換が行われるのであろうか。シンガポールの口語英語（SCE: Singapore Colloquial English、以下SCEと呼ぶ）にも、上記の例のように標準英語から離れた独特の表現が多く存在する。

シンガポールでは4つの公用語（英語、華語、タミル語、マレー語）が制定されており、言語状況は非常に複雑で、英語のみに注目しても、SE (Singapore English) という単一の用語では規定できない (Pakir 1991)。社会言語学的なアプローチでは、Platt (1975) やTay (1982) はSEをその使用場面から、Accrolect, Mesolect, Basilectの3種類に分類するレクタルコンティニュームという捉え方を打ち出した。また、Ferguson (1959) はSEをHigh Variety (フォーマルな場面で使用される変種) とLow Variety (インフォーマルな場面で使用される変種) の2種類によるダイグロシア状況の下に使用される言語であるとしている。

しかし、そのような分類は、もはや現代のシンガポールの英語状況に当てはまらなくなって

きた。PlattやFergusonは、英語で教育を受けた一部の人々と、そうでない人々が存在するという前提のもとにSEモデルを構築していたのである。英語の普及が進み、最低でも10年間は英語媒介による教育を受けた人々が国民の大半を占めている近年では、SEをあらたに‘The Glocalization Model’ (Alsagoff 2010) ととらえ直す動きがある。前述の研究者達は、段階的な英語変種を想定し、会話における英語変種間の切り替えをコードスイッチングと定めたのに対し、Alsagoffは新たにスタイルシフティング (style-shifting) という概念を導入している。つまり、現代シンガポール人の話者はSEの多次元的連続体に沿って文体 (またはスタイル: style) を流動的に変化させていくという考え方である。

SCEはシングリッシュ (Singlish) と呼ばれることもあり、シンガポールとイングリッシュ (Singapore, English) を合成して創造された一般的な名称である。また、SCEはSSE (標準シンガポール英語: Standard Singapore English) と対照的に位置付けられるモデルである。SCEのなかでも文末詞 (particle) はSCEを特徴付ける注目すべき要素である。本稿では、SCEにおける文末詞使用の本質をポライトネス理論におけるフェイス威嚇行為 (FTA: Face-Threatening Acts, Brown and Levinson 1987、以下FTAと呼ぶ) の観点から分析、考察を行う。

1. ポライトネスの定義とフレームワーク

ポライトネスは、その本質からして価値判断を伴うものであるが、それゆえに研究者は自らの価値判断から逃れることはできない。普遍的なポライトネスの理論的モデルを設定するにあたっては、まず言語と非言語からポライトネスのさまざまなストラテジーを分離させて扱わなければならないのであるが、Watts (2003) は、もともと社会的相互関係は言語と非言語によって構成され、規則化され、再生産されているのであるから、分離は不可能であると述べている。彼はまた、仮に普遍的なポライトネス理論や言語学的ポライトネスが確立された場合、そのモデルはすべての文化に適用可能でなくてはならないが、そのようなモデルはいまだ存在しないとも言っている。あえて言えば本稿のフレームワークに引用するBrown and Levinsonの研究が普遍性の追及に力を注いでいるが、様々な論議をよんでいる状況である。詳しい問題点についてはWatts (2003: Chapt.4) を参照されたい。

1.1 ポライトネス概念

ここで、Wattsがあげている歴代の研究者のポライトネスに関する定義をいくつか紹介しよう。

- 1) 人間関係における衝突回避のために社会の構成員によって開発されるもの
Lakoff (1975)
- 2) 「衝突回避のためのストラテジー」であって、衝突状況の回避に費やされる努力の度合いという点から評価されるものである。そして礼節を打ちたて、維持するものである。
Leech (1980)
- 3) フェイスを脅かす行為を軽減するための複雑なシステム
Brown and Levinson (1978)
- 4) 人間相互の助け合い
Arndt and Janney (1985)
- 5) スムースなコミュニケーションと連携する言語使用である。
井出 (1989)

Wattsは、研究者たちのポライトネスについての共通概念は「調和のとれた社会的相互関係を生み出す関係を導くこと」であると言っている。また、道徳的な要素や子供の社会心理学的発達要素も含むという点も研究者間での共通認識事項である。本稿では、上で述べた定義3)の提唱者Brown and Levinsonのポライトネスモデルの枠組みに沿って分析を試みる。

1.2 Brown and Levinsonのポライトネス理論

ーフェイス喪失を最小限に留める概念としてのポライトネスー

標題にもあるように、Brown and Levinsonはポライトネスを考えるに当たって、まずフェイスという概念を導入した。このフェイスはErving Goffmanのフェイス概念に基づくものである。以下の表はGoffmanとBrown and Levinsonのフェイスについての対照表である。

Goffman	Brown and Levinson
<ul style="list-style-type: none"> * 「ポジティブな社会的価値」であって、ある特定の接触の最中に、ある人物が一線を引いていると他者がみなすことによって効果的に獲得するものである。 * 承認された社会的属性に関する自己描写像である。 	<ul style="list-style-type: none"> * 社会構成員の誰もが獲得したい公的自我像であり、ポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスから成る。 * ネガティブ・フェイス：動揺しないでいたいという基本的な願望、つまり行動の自由及び負担からの自由。 * ポジティブ・フェイス：参与者の承認による一貫したポジティブな自我像あるいは「個性」（この自我像は評価を受け、承認されるもの）

Watts (2003, p.104 Table 4.1を元に筆者が作成)

GoffmanとBrown and Levinsonのそれぞれのフェイス概念の基本的な相違は、次のように言うことができる。Goffmanの「ポジティブな社会的価値」は参与者によって変化するだけで

なく、相互関係の中で一瞬一瞬変わっていく。よって、参加者の中でのそれぞれのフェイスは確固としたものではなく、変化し得るものである。それに対して、Brown and Levinsonの参加者は、それぞれがあらかじめ自画像を確立している。変化はし得るものの、Goffmanのフェイスほどではない。

別の観点からすれば、Goffmanのフェイスは話し手を含む参加者すべてのフェイスに対する威嚇行為を最小に留めることが概念の中核であるのに対し、Brown and Levinsonのフェイスは、話し手のポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスの使い分けによって、参加者全体のバランスを保つという概念構成になっている。

Brown and Levinsonは、以上に述べたポジティブ／ネガティブのフェイス概念を適用して、a) ポジティブ・ポライトネスと b) ネガティブ・ポライトネスを設定し、ポライトネス・ストラテジーを次のように説明している。

- a) 話し手のポジティブ・フェイス（他者に認められたい、評価されたい、尊敬されたい、好かれたいetc.という願望）を支持する、あるいは高める。
- b) 話し手の自由に行動したいという欲望や負担をかけられたくないという欲求（ネガティブ・フェイス）への違犯を回避する。

MP（Model Person：ポライトネス・ストラテジーを行使する人）は、以下の5種類のFTA（フェイス威嚇行為：face-threatening acts）のストラテジー（①聞き手のフェイスを威嚇する意味で最悪～⑤最も聞き手のフェイスを威嚇しないという段階になっている）の中から適当なストラテジーを選択して、FTAを完全に回避するのか、軽減（最小化）するのかを決定する。

- ① 婉曲行為なしにずばりと口にするによりFTAをする
- ② 聞き手のポジティブ・フェイスに働きかけることによりFTAをする
- ③ 聞き手のネガティブ・フェイスに働きかけることによりFTAをする
- ④ オフ・レコード（直接言わない）にすることによりFTAをする
- ⑤ FTAを行使しない

Brown and Levinson (1978, p.69) は、上の5つのストラテジーをMPが選択する際の経路を図示している。実際、どのストラテジーを選ぶかの選択経路は複雑で、提示されているほどシンプルではあり得ないというポイントから、他の研究者の批判を被っている。その理由により本稿では省略した。また、MPは、一回の発話行為で複数のポライトネス・ストラテジーを選択・使用する可能性もある。本稿では、Brown and Levinsonのポライトネス・ストラテジー

の分類法に注目し、特にポジティブ・ポライトネスの項目にのみ焦点を当てる。

1.3 ポジティブ・ポライトネスのストラテジー

Brown and Levinsonは以下の15のポジティブ・フェイスが存在すると述べており、それぞれの例はポジティブ・ポライトネスのストラテジーを使用した文である。

- (1) 聞き手に対し注目・注意する（聞き手の興味、願望、ニーズ、所有物などへ）

Goodness, you cut your hair! (…) By the way, I came to borrow some flour.

- (2) 強調する（聞き手に対する興味、承認、同情について）

What a fantastic garden you have!

- (3) 聞き手への興味を強調する

I come down the stairs, and what do you think I see? – a huge mess all over the place, the phone's off the hook and clothes are scattered all over…

- (4) 仲間内の共通の標識（marker）を使用する

Help me with this bag here, will you luv (son/pal) ?

- (5) 同意を求める（相手の言ったことを繰り返すことで同意を示すなど）

A: John went to London this weekend!

B: To London!

- (6) 反論を回避する（同意してみせたり、反論の意を隠したり婉曲にしたりする）

A: That's where you live, Florida.

B: That's where I was born.

- (7) 共通基盤を、前提条件とする／提示する／主張する

Now, have we taken our medicine? (doctor to patient)

- (8) 冗談をいう

OK if I tackle those cookies now?

- (9) 聞き手に関する知識・関心事を話し手が主張する／前提とする

I know you can't bear parties, but this one will really be good – do come!

(request/offer)

- (10) 申し出る／約束する

I'll drop by sometime next week.

- (11) 楽観的にことを進める

Look, I'm sure you won't mind if I borrow your typewriter.

- (12) 話し手と聞き手を同じ活動に巻き込む

Let's have a cookie, then. (i.e. me)

(13) 理由を述べる

Why not lend me your cottage for the weekend?

(14) 交換条件を提示する／断定する

I'll do X for you if you do Y for me.

(15) 聞き手に恩恵を与える（物、同情、理解、協力）

（原文では例文はなし）

ここで注意すべき点は、以上の例は、あくまでイギリス英語と欧米の文化を基盤としたポライトネス・ストラテジーであり、第1節冒頭で述べたように必ずしも普遍的なモデルではないということである。

2. SCEのポライトネス分析（ポジティブ・ポライトネスの見地から）

この章では、SCEの文末詞をポライトネスの観点からみた場合、I) 文末詞そのもののポライトネス機能、II) 文末詞が付加された会話文のプラグマティクスの二つのポイントについて考察していきたい。

SCEのルーツを遡ると、イギリス英語をコアに、アメリカ英語、ヨーロッパ諸国人の使用するノン・ネイティブ英語、さらにはマレー語や中国語の方言（福建語、広東語など）が混入しており、およそ2世紀にわたって練成されてきた言語である。文法構造をとってみても標準イギリス英語との相違は大きい。さらに中国語やマレー語などからの借用語も多く見られるのが特徴である。

SCEには標準英語とは多くの文法上の違いがあるが、本稿では文末詞のみを扱い、その他の構造上の特徴には言及しない。ただし、ポライトネスとの関連性において、今回取り上げる文末詞だけでなく、SCEの特徴を持ったすべての文法項目に共通と見られるストラテジーがあるが、それは第1章、1.3の(4)「仲間内の共通の標識(marker)を使用する」である。

SCEは多民族国家シンガポール国民の、シンガポール人としてのアイデンティティの一部であり、シンガポールの言語である（英、米の英語に対して）という認識がある。SCEを使用することでローカリズムが喚起され、親しさや安心感、リラックスしたムードなどを伝えることが可能になる。ここでは「シンガポール人はSCE使用においてFTAを軽減・回避するという言語的なテクニックを行使している」という仮説を立てて検証していく。

2.1 SCE文末詞のポライトネス機能

SCEの中でも、文末詞は文に微妙なニュアンスを付加するという意味で重要な役割を持っている。感情表現のために

a, lah, what, ma, ho, har, loh, leh, meh, mah, har, erh

などが頻繁に使われる。これらの文末詞は、マレー語からの借用であるという説と福建語からの借用であるという説に分かれて論議を呼んでいるが、現在のところ決定的な裏付けはない。また、本稿ではこれらの ‘particle’ を「文末詞」と呼ぶが、「終助詞」、「文末小辞」と表記される場合もある。

はじめに、以下の3つの例文から文末詞によるニュアンスの相違について考察してみよう。

- a) I love you, *lah*.
- b) I love you, *leh*.
- c) I love you, *loh*.

a) は、親しい間柄で、積極的な、意思や感情をはっきりと出した表現となる。どちらかといえば断定的で明るいムードが伝わる。それに比べるとb) はかなりソフトな言い回しとなり、‘I love you’ というときの内面の羞恥心やためらいの気持ちが付加される。一方c) は仲たがいたときに配偶者がしぶしぶ表現するときのような、わかっているはずなのにといったニュアンスや、本来は口に出して言いたくない内容ではあっても、状況によって言わざるを得ないという場合に使用される。

ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの分類から言えば、a) の*lah*は自分の意思を明確に伝える断定に使用されているのであって、第1節、1.3（以下、括弧のついた番号は第1節1.3からの引用とする）の（5）の聞き手に受け入れあるいは同意を求めた形となる。また積極的な働きかけという意味において、（11）の楽観性や（15）の恩恵授与（この例文の場合は、動詞 ‘love’ の意味も干渉しているので、さらに強調される）のストラテジーも含まれている。*Lah*は ‘OK, lah.’ とか ‘Of course, lah’ といった申し出、受け入れのニュアンスを強調して、聞き手に安心感を与える働きも持つ。これは（10）の申し出、約束にあたると言えるだろう。

b) の*leh*は婉曲的で、遠慮がちな響きを持つ。聞き手に対する興味を示しながらも、積極的に同意を求めるというよりは、むしろ、相手に拒絶されることへの不安を示しているという意味で、（6）の反論回避のストラテジーが使用されていると見ることができる。

一方、c) の*loh*には、聞き手に「本当は（愛していることが）分かっているはず」といっ

た意味を伝える機能があり、(6)の反論回避や(7)の共通基盤の前提を提示するというストラテジーが使われていると考えることができる。「聞き手に‘I love you.’と言わないことで、結果的に聞き手のフェイスを脅かす行為になってしまうのを避けるために、あえて‘I love you.’と言う」という意味においては、ネガティブ・ストラテジー（第1節1.2参照）が使われているとみることも可能である。

次の例では、状況が設定されているので、さらに文末詞の役割がはっきりしてくる。妻がビデオ鑑賞中、夫が途中から参加して、そのまま続けて見ていたい妻に対して依頼する。

- d) Start again from the beginning. (もう一度最初からみ見るぞ)
- e) Start again from the beginning *lor*. (もう一度最初から見せてよ～)

d)の表現では、ダイレクトな強い命令になってしまい、トラブルに発展しかねない。一方、e)のように言った場合、この*lor*は、すねたような響きを持つ。これも*lor*のもつポライトネスの機能により、(6)や(7)のストラテジーが働いた結果といえる。同じ状況で、妻が上記の夫の提案に答える方法として、次の2例を比較してみよう。

- f) OK, *lah*
- g) OK, *lor*.

f)では、妻は夫の申し入れを素直に受け入れているのに対し、g)では内面的な抵抗が加わってくる。英語のネイティブ・スピーカーが、このような場面では、声のトーンやイントネーションなどで心理的な微妙なニュアンスを表すのに対し、シンガポール人は、まず言語レベルで文末詞という手段を使うのである。

2.2 SCEのプラグマティクスにおける文末詞の役割

以下、ポジティブ・ストラテジーの項目に該当するSCEの文末詞を含む文例を挙げていこう。ただし、前述したように、ポライトネスのモデルを設定するに当たっては、文化、言語の干渉を受けることは免れない。さらに、個人個人のポライトネスに対する価値観の違いもあり、結果として個々の研究者の価値観（ポライトネスをどのように捉えているか）を統一することは難しい。

ここで使用するBrown and Levinsonのモデルはあくまで欧米の価値観に基づいたポライトネスを用いたストラテジーであるため、SCEの使用者（主として儒教を基盤とした東洋的、中国的価値観を持つ）のポライトネス・ストラテジーと相違があるのは当然のことである。よっ

て、本稿の分析では、Brown and Levinsonの各項目の概念を核として、筆者がSCEに内在する文化的価値観を加味しながら考察したものにとらえていただきたい。文中の太字がポライトネス・ストラテジーとして注目した文末詞である。なお、以下の(2)、(5)、(6)、(7)、(8)、(10)は、「1.3ポジティブ・ポライトネスのストラテジー」の番号と呼応しているのでご参照いただきたい。

(2) A: Is it better to be a towkay or a construction worker?

(ボスになるのと、現場労働者になるのとどっちがいい?)

towkay: 潮州語でトップ、ボスの意

B: Of course towkey *lah*. Got air-con office *what*.

(もちろんボスさ。エアコンの効いたオフィスがあるからね)

コメディからの引用である。この*what*を使用することで、エアコンの効いたオフィスについての賞賛を強調し、相手の意向(Aは当然ボスのほうがいいと思っていること)に合わせている。

I'm not a student *what*.

(ぼくは学生なんかじゃないよ)

このように否定的な文で使用される*what*は、相手が自分を正しく評価してくれなかったり、理解してくれなかったりする場合に表れる。*what*のない文では断定的になりすぎ、FTAを強く打ち出すことになってしまう。

(5) A: No more mahjong.

(マージャンはもう禁止)

B: When I play mahjong, I win money.

(マージャンすれば、お金が儲かるわ)

A: Oh, then you can still play *lah*.

(ああ、それじゃやってもいいよ)

これはAが夫、Bが妻にあたる夫婦のユーモラスな会話の一部である。夫の文の*lah*がない文では、夫が妻に許可を与えるというやや強い上下関係になってしまうが、*lah*を付加することで、妻のマージャンを肯定的に捕らえ、受け入れているという温かみのあるニュアンスが伝わる。夫は表面的にはお金が儲かるという理由で許可したという体裁をとりながら、実は妻の行為に反論はしないという姿勢をさりげなく盛り込んでいる。「お金が儲かる」のは必ずしも真実ではなく、(8)の冗談の要素も絡めてFTAを軽減している例であろう。

(6) Sorry *har*, sorry.

(すみませんねえほんとに、すみません)

シンガポールでは、標準英語で謝ると、どうしても慇懃無礼になりがちである。それで、このように*har*を挿入することで、謙譲のニュアンスが加わり、FTAを回避することができる。

A: Don't call me Ah Pa.

(お父さんとは呼ぶな)

Ah Pa: 福建語でお父さんの意

B: Then I call you daddy *lor*.

(じゃ、ダディーって呼ぶよ～)

息子のだらしない行状に、父親が業を煮やした場面である。息子は、自分を理解してくれない父にすねたり甘えたりするニュアンスを加えながら、柔軟に対応している。*lor*の使用により相手のフェイスに気を配り、反論される可能性を低めているのである。

I must teach you Karaoke. Sing *leh*, sing.

(カラオケでどう歌うか教えてあげなきゃね。歌ってごらん、ねえ、歌ってよ)

ためらう友人に歌うように促す場面の会話例であるが、無理強いしてFTAを行使するのではなく、*leh*を挿入することでソフトな誘いというニュアンスに転換している。

I want to know. Tell me *leh*, tell me *leh*.

(知りたいわ。教えてよ、ねえ、教えてよ)

前の例文とほぼ同じ働きで、婉曲的な依頼であるが、2文ともネガティブ・ポライトネス・ストラテジーであるということもできる。

(7) Wasting time is like wasting money *erh*.

(時間の浪費はお金の浪費だよ)

シンガポール人共通の金銭感覚が土台になっている。*erh*はその共通の認識を喚起して、その後に続く話題をスムーズに運ぶ役割を果たしているといえるだろう。

(8) Wah, one percent *ah*. So much *hor*.

(うわ～、1パーセントなの。ずいぶん多いわね)

従業員の昇給について話し合っている場面から採用した一文である。1パーセントでは低いというメッセージを、冗談に置き換えて反論的に表し、FTAを軽減しながら相手に伝えるストラテジーだと見ることができる。2つの文末詞は相手の反応を予測しながら要求を投げかけている婉曲的なメッセージを含んでいる。

(10) Call me Henry *lah*.

(ヘンリーって呼んでよ)

これは、初めて出会った人に対する申し出であるが、*lah*のない文ではシンガポール人同士ではフォーマルすぎて、かえってFTAを打ち出すことになりかねない。あえて*lah*を付

加することは、相手が安心して会話を進められるようにという気遣いであり、親密さが示され、場のムードがリラックスしたものになる。

本稿で扱ったSCEの文末詞はごく一部である。文末詞のほかにも、ポライトネス・ストラテジーの機能を持っているSCE構造は多数見受けられる。例えば、聞き手に同意を求める‘isn’t it?’、中国語からの干渉と見られる‘~or not?’、動詞、形容詞、名詞の反復、中国語、マレー語、タミル語からの借用語、英語の転用語、中国、マレー文化のメタファーの直訳などである。これらについての研究は筆者の今後の課題としたい。

おわりに

本稿の冒頭で述べたように、日本人も状況次第では丁寧語を使わずに、わざわざスラングや方言などのくだけた表現を使用することがある。シンガポールに当てはめれば、SEの中でもくだけた言語であるSCEを使用することで、コミュニケーションをスムーズに行おうとする場面が頻繁に見られる。

これは、ポライトネス概念を、単なる「丁寧でフォーマルな表現を使用する」というレベルでなく、より拡大して「コミュニケーション参加者のフェイスへの気遣い」といったレベルで捕らえることにより説明がつく事象である。Brown and Levinsonのポライトネス理論では、参加者のFTAをいかに軽減、回避するかがポライトネス概念のコアになっており、本稿の分析により、SCEにもそのような機能やストラテジーが内在していることが分かる。

SCEの文末詞はほとんどが1音節からなる短い単位であるが、実際の会話場面では、様々なイントネーションとの組み合わせが存在し、表現はさらに広範囲に及ぶ。第2節で述べたように、SCEの文末詞は、文全体のメッセージの伝達において重要なポジションを占めている。文末詞はSCEのみならず、SSE（標準シンガポール英語）の文に付加するだけでも参加者のフェイスに対する心遣いが生じるという優れた機能を保有している。

筆者はシンガポールと関わりを持ってから、シンガポール人主催のミーティングに数多く参加した。開催者やゲストの挨拶はSSEで行われるのが常であったが、その後、交流や食事の場面ではSCEによる会話が飛び交っていた。そこで最も耳に残るのは本稿で取り上げたlahやmehやharなどの文末詞である。これらの文末詞の響きは、シンガポール人同士のローカリズムを喚起し、パーティーにふさわしい親密さとリラックスした雰囲気を演出するのであろう。本稿の分析は、シンガポールのこのような言語使用の実態が真の意味でのポライトネスであるということ、つまり相手のフェイスに配慮した行為であるということアカデミックに確認するチャンスであった。

参考文献

- Alsagoff L. and Ho C. (1998) "The relative clause in colloquial Singapore English" in *World Englishes*, Vol.17, No.2, pp.127-138. Blackwell Publishers.
- Alsagoff L. (2007) *Singlish: Negotiating culture, capital and identity* in *Language, Capital and Culture*. Edited by Viniti Vaish, S. Gopinath and Yongbing Liu, pp. 25-46 Sense Publishers.
- Alsagoff L. (2010) *Hybridity in ways of speaking: The Glocalization of English in Singapore* in *English in Singapore*. Edited by Lisa Lim, Anne Pakir and Lionel Wee. Hong Kong University Press.
- Brown P. and Levinson S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Ferguson Charles A. (1959) *Diglossia*, *Word: Journal of the Linguistic Circle of New York*. New York International Linguistic Association.
- Gupta Anthea Fraser. (1988) *A Standard for Written Singapore English?* in *New Englishes*., National University of Singapore: Singapore University Press.
- Lionel Wee Hock. (2016) *Singlish as Style: Implications for Language Policy* in *MANAGING DIVERSITY IN SINGAPORE: Politics and Prospects*, edited by Mathew Mathews, Chiang Wai Fong. Imperial College Press.
- Pakir Ann. (1997) *English in Singapore: The Codification of Competing Norms in Language and Society in Singapore: Issue and Trends*, edited by S. Gopinathan, Ann Pakir, Ho Wah Kam & Vanithamani Saravanan, Times Academic Press.
- Platt John T. (1975) *The Singapore English speech continuum and its basilect as 'Singlish' as 'creoloid'*, Vol.17, pp. 373-374. *Anthropological Linguistics*.
- Platt John T. and Weber Heidi. (1980) *English in Singapore and Malaysia: Status, Features and Functions*. Oxford University Press.
- Tay Mary. (1982) "The Uses, Users, and Features of Englishes in Singapore" in *New Englishes* edited by John B. Pride Rowley. Newbury House.
- Watts Richard J. (2003) *Politeness: Key Topics in Sociolinguistics*. Cambridge University Press.

[ウェブサイト]

A Dictionary of Singlish and Singapore English: www.singlishdictionary.com